



学校だより

# 紫 草

令和8年9月4日  
武蔵野市立第三中学校



## 『 恩 送 り 』

校長 竹山 正弘

8月27日から2学期がスタートしました。

7月28日に熊本で震度7の地震が発生し、大きな被害がありました。また、8月中旬以降、特に関東地方や北陸地方で大雨による被害が相次ぎました。被災された方々には、心よりお見舞い申し上げます。一日も早く通常の生活の戻れることを願うばかりです。

夏休み中は、暑い中で汗を流しながら一生懸命に練習に励むみなさんの姿を見ることができました。あまりにも気温が高く、十分な練習量を積むことは、難しかったかもしれません。7月のバドミントン部・卓球部の都大会、8月8日の吹奏楽部のコンクール、8月初旬からの市内中大会、水泳の全国大会、美術部の黒板アートなどでは、日頃の成果を発揮して、とても健闘したと思います。練習に打ち込んだ分の成果が得られたのではないかと思います。

夏休み中には、スポーツや環境問題、国際的な経済問題、戦争や紛争など、様々な報道がありました。皆さんは、どんな問題に関心をもったでしょうか。

私は、冒頭でも触れましたが7月の熊本地震に関してです。大きな被害をもたらしたという報道の中で、多くの方々の支援に関する話題に心惹かれました。災害に関する報道から抜粋した内容を紹介します。

7月31日の「能登（石川県）の方々から、過去に支援を受けた恩返しとして熊本地震の被災地へボランティアや物資の派遣、義援金等の支援が行われています。」という報道です。（7月28日の地震直後から支援活動の動きが始まったということです。）

### ☆「能登の方々の思いとは何か？」に対し、

#### ①お世話になった恩返しをしたい

能登半島地震と豪雨の二重災害を経験し、「被災当時、熊本からのボランティアにとっても助けられた。今度は自分が恩返しする番。」

#### ②被災経験者だからこそ分かる「寄り添い」

能登の厳しい現状や、被災した家族・友人が地域行事の再開とともに元気を取り戻していく姿を見てきた参加者は、「熊本でも心が折れてしまっている人が多いのではないかと」現地の被災者に深く心を寄せている。

#### ③被災地同士の「つながり」

多くの参加者が、「助けてもらったからこそ、今困っている人のところへ行くべきだ」、「自分たちが前を向いて頑張っている姿を見せることで、少しでも力になりたい」と発言しており、単なる作業手伝いを越えた「復興の歩みをともに進める仲間」としての絆を重視している。

報道では、支援の輪が次へとつながっていく「恩送り（おんおくり）」の精神が、能登の参加者たちの原動力になっています。「恩送り」という言葉は、いただいた「恩」をその人に返す（恩返し）だけでなく、「別の困っている人へ回していくことで社会全体に支援を循環させる」という温かい決意が言葉に表れているということです。

### ☆「ボランティア等の参加者が語る『恩送り』の形とは何か？」に対し、

#### ①「次は自分たちがつなぐ」という使命感

能登の被災時に全国から受けた無数の優しさや物資を、今度は自分たちが熊本へ届けることで、支援のバトンを次の被災地へと引き継いでいるという意識を強く持たれています。

#### ②経験という財産を回す

物資や労働力だけでなく、直近の被災経験から得た「今何が必要か」「どう声をかけたら心が休まるか」という生きた知恵やノウハウを次の被災地に手渡すことも、重要な恩送りとなっています。

#### ③未来への支え合いへ

この能登から熊本への行動を見た人が、また将来どこかで災害が起きたときに動くきっかけになるという、未来へ向けた循環も期待されています。

（以上になります）

私は、被災という悲しい出来事の中でも、「こうした『恩送り』の連鎖によって、人と人との強いつながりが日本各地へ広がっています」という報道にとっても深い感動を覚えました。みなさんはどう思うのでしょうか？

この夏休みも含め、様々な出来事がある中で、世の中の動きを考察し、自分事としての考えをもつことは、ますます大切なことではないかと思いました。みなさんはいかがでしょうか？

